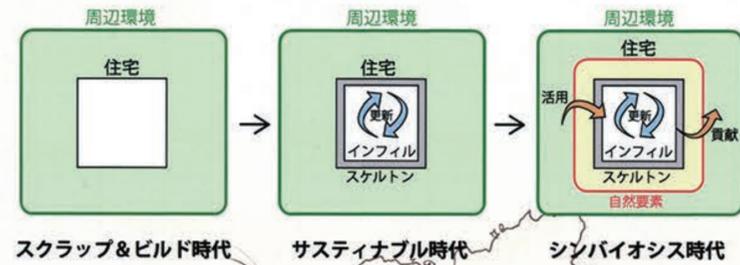


# 住宅が育てる住宅

住宅は、その機能を失えば建て直すスクラップ&ビルド時代を経て、耐用年数の異なるスケルトンとインフィルとを別で考えるSI住宅の考え方が生まれ、サステナブル時代となってきた。しかし、自然エネルギー利用は近年発展を見せているが、太陽光パネル、地熱利用などアクティブ利用に留まり、それは自然エネルギーを人間の使いやすいエネルギーに強制的に変えているに過ぎない。

住宅が環境から断絶するツールである以上両者の関係はこれ以上改善されない。もし自然要素そのものを建築に取り込み、人が自然を活用し、貢献する関係が維持されれば環境との共生（Symbiosis シンバイオシス）する住宅となると考えた。そうなるためには住宅は、住民とともに成長し続け、自然と向き合い、常に過渡期であることが求められる。



## 想定する敷地

南前面に空地を残し高層集合住宅が建てられ人が住み始める。前面の空地の環境を住民自ら管理し育て、自然と共生できるセカンドハウスをつくる。

私の考える過渡期の住宅は、先に高層集合住宅が建設され住まうことから始まる。この前面空地の環境作りから始まる過渡期が、自然から学ぶ教育、住民間のコミュニティ、資産価値維持・向上にも繋がる重要な過程なのである。

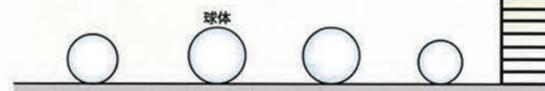


## 想定されるセカンドハウスの使われ方

- ・ 終の住まい
- ・ 日常の住まいに加えての別荘
- ・ 子・孫への住まい
- ・ マイオフィス・書斎

## 営みの流れ

1 ...0年  
雨水を貯水する球体が空地に配置される。



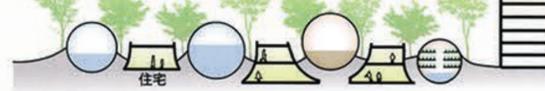
2 ...10年後

球体は雨水を貯水し、住民により植樹された樹木を育てる。また一部の球体を温室とし、生活ごみを堆肥化、植樹用の苗木も育てられる。



3 ...20年後

高木化した木を利用しながらセカンドハウスは構築される。それは高層集合住宅のランドスケープにもなる。

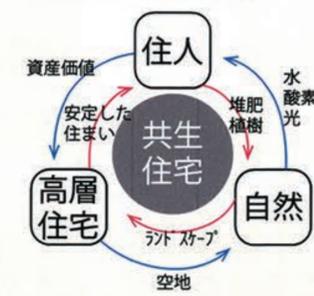


4 ...50年以降

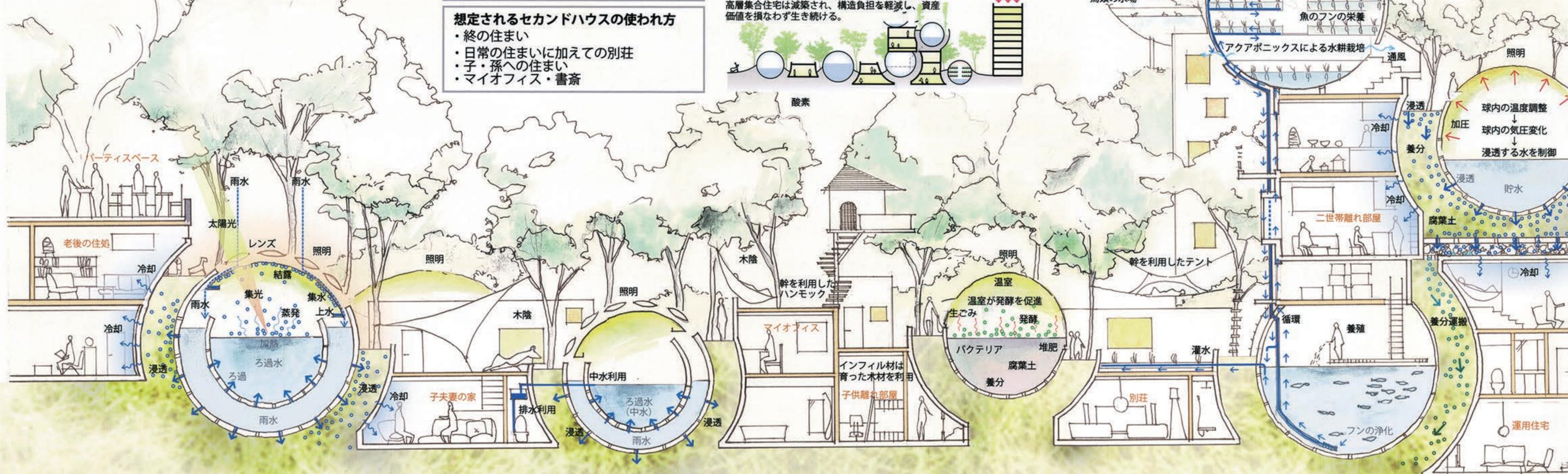
一部住民はセカンドハウスとしてではなく高層住宅から空地の住宅に移り住む。住民が減り老朽化した高層集合住宅は減築され、構造負担を軽減し、資産価値を損なわず生き続ける。



## 共生住宅に必要な関係



この共生住宅が構築され続けるには「住人」「自然」「高層住宅」の相互の関係が成り立ち続けなければならない。



球体の使われ方  
球体は様々な自然要素を建築に取り込むツールとして使われる。その使われ方は多岐にわたる。

